

様式6 (第15条第1項関係)

平成30年 4月 9日

独立行政法人
日本学術振興会理事長 殿

研究機関の設置者の所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町36番地1	
研究機関の設置者の名称	国立大学法人京都大学	
代表者の職名・氏名	学長 山極 壽一 (記名押印)	
代表研究機関名及び機関コード	京都大学	14301

平成29年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2701	補助事業の完了日	平成30年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	地域研究 (2701)
補助事業名(採択年度) グローバル化にともなうアフリカ地域研究パラダイム再編のためのネットワーク形成(平成27年度)				補助金支出額(別紙のとおり) 28,820,000円	
代表研究機関以外の協力機関					
海外の連携機関 ケルン大学, ドイツ霊長類センター, エジンバラ大学, 国立科学研究センター, アジス・アベバ大学, ヤウンデ第1大学, ケープタウン大学, アンタナナリヴ大学, マギル大学					
1. 事業実施主体					
フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野	
主担当研究者 イケノ ジュン 池野 旬	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	教授	アフリカ地域研究, 経済学	
担当研究者 カジ シゲキ 梶 茂樹	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	特任教授	アフリカ地域研究, 言語学	
キムラ ダイジ 木村 大治	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	教授	アフリカ地域研究, 生態人類学	
ヤマコシ ゲン 山越 言	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	アフリカ地域研究, 霊長類学	
タカダ アキラ 高田 明	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	准教授	アフリカ地域研究, 文化人類学	
金子守恵 (H29.8月 まで参画)	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	アフリカ地域研究, 生態人類学	
サトウ ヒロキ 佐藤 宏樹	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	助教	アフリカ地域研究, 霊長類学	
計7名					

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先(電話番号、e-mailアドレス)
アラカワ カオリ 荒川 香織	南西地区共通事務部経理課外部資金 第一掛・掛員	電話番号: 075-366-7121 e-mail: A50gaishi1@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

2. 本年度の実績概要

平成 29 年度はまず金子守恵准教授が、平成 28 年度科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）の応募要件を満たすため、8 月末で担当研究者からはずれた。金子守恵准教授が担当していた アジス・アベバ大学との交流は当初予定していた目的を達成し、組織的教育・研究協力体制が確立しているため、当該変更に伴う研究計画全体への影響はない。ケルン大学、ヤウンデ第一大学、エジンバラ大学、国立科学研究センター・社会科学高等研究院（EHESS）、ケープタウン大学、アンタナナリヴ大学に計 4 名の担当研究者を派遣し、これからさらに共同研究を推進していくための折衝・調整を行った。

12 月 1 日～3 日には本事業の主要な成果の 1 つとして、EHESS と共同で京都大学において国際シンポ"France-Japan Area Studies Forum"を行った。この国際シンポは、本事業の若手研究者が中心となってオーガナイズした。国外から 23 名、国内から 65 名の参加者があり、グローバル化する社会におけるアフリカ地域研究の成果や課題について活発な議論を行った。このうち本事業の予算では EHESS、アジス・アベバ大学、マギル大学、ケルン大学、アンタナナリヴ大学から計 9 名の主要連携研究者・連携研究者を招へいした。これ以外にも本年度は EHESS、エジンバラ大学、ケルン大学、ドイツ霊長類研究所から計 7 名の主要連携研究者・連携研究者を招へいし、これからこれらの連携機関と京都大学との間でさらに組織的な関わりを強化し、共同研究を推進していくための折衝・調整を行った。また、招へいされた主要連携研究者・連携研究者を中心として、連携機関での国際化の取り組みやその研究内容に関する 5 回の連携国際ワークショップ（昨年度に引き続き「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」）を 2017 年 9 月 12 日、10 月 13 日、12 月 8 日、2018 年 2 月 19 日、3 月 5 日にいずれも京都大学において開催した。

そして平成 28 年度に引き続いて、ドイツ霊長類センター、アンタナナリヴ大学、ケルン大学、EHESS、アジス・アベバ大学、エジンバラ大学の 6 機関に、3 名の若手研究者を派遣した。具体的には、ドイツ霊長類センターおよびアンタナナリヴ大学へ長年マダガスカルで調査を行ってきた市野進一郎博士を派遣し、アフリカ地域における新たな研究課題である「アフリカ生物保全学」を推進した。またエチオピアにおける女性教育の推進に伴う諸問題について研究してきた有井晴香博士をアジス・アベバ大学へ派遣した。有井博士は、現地で地域社会の変容に関する調査・研究を行った。さらに、狩猟採集民として知られているバカのもとで長期フィールドワークを行ってきた園田浩司博士をエジンバラ大学に派遣した。園田博士は、バカをはじめとするアフリカの子どもたちの言語的社会的化に関する調査・研究を行った。これらによって市野進一郎博士、有井晴香博士、園田浩司博士は当初予定していた連携機関への派遣を成功裏に終えた。

また、やはり本事業の主要な成果の 1 つとなる論文集を学術季刊誌 African Study Monographs (ASM) の Supplementary Issue として発行した。この特集号は 2 つのパートからなり、第 1 のパートでは本事業の主要連携研究者・連携研究者・担当研究者が中心となってそれぞれの連携機関および京都大学におけるアフリカ研究パラダイムを再考する 5 本の論文を寄稿した。第 2 のパートでは、本事業で連携機関に派遣された若手研究者 5 名が中心となって、派遣先での共同研究の成果に基づく最前線のアフリカ地域研究の事例を論文にまとめた。この特集号は連携機関をはじめとする計 650 の研究機関・研究者に配布された。

また本事業で重点を置く GIS 関連資料解析・アフリカ地域研究資料データベース構築のために、A3 スキャナ、ArcGIS および SPSS 論文作成用ソフトウェア・図書等一式（国内外のアフリカ研究のトレンドの動向を知るための書籍に重点を置いた）等を購入した。加え

て、連携研究者との連携を強め、日本滞在中の研究活動をサポートするために Web 会議用スピーカー、PC 一式を購入した。さらに公開中の本事業独自のホームページ<<http://brain.africa.kyoto-u.ac.jp/>> (和文、英文) の充実を図った。このホームページでは、プロジェクトの概要、事業実施体制、連携機関の概要、派遣報告書、プロジェクトの成果、若手研究者への申請手続き、国際シンポなどについての情報を掲載しており、プロジェクトの進展に応じて随時更新している。このホームページは、本事業の成果を記録に残すために DVD 化して上記の特集号とともに連携機関をはじめとする計 650 の研究機関・研究者に配布された。

3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

本事業の目標は、地域研究のための研究環境が卓越しており、従来から京都大学のアフリカセンターと ASAFAS アフリカ地域研究専攻（以下、アフリカ専攻）が学术交流を行ってきた海外の連携機関との双方向的な学术交流をさらに推進し、グローバル化が著しい現代世界において「アフリカ地域」を理解していくための研究パラダイムを再編することである。「2. 本年度の実績概要」で記した平成 29 年度の活動はこの目標に沿って計画したもので、これらにより連携機関との協業関係をいっそう強化することができた。目標はおおむね達成できたと考えている。とりわけ、12 月 1 日～3 日に行われた国際シンポは連携機関である EHESS の全面的な協力が得られたために、当初の予定を大きく上回る規模で活発な議論を行うことができた。国際シンポ直前に先方のやむを得ない事情で招へい者 2 名のキャンセルがあったが、email や IP 電話による連絡や論文の代読によって全体としての研究計画へできるだけ影響が生じないように尽力した。また、2018 年 2 月には連携機関であるアンタナナリヴ大学との部局間学术交流協定を締結したことも特筆に値する。

また当初の予定通り、EHESS、ケルン大学、ヤウンデ第一大学、ケープタウン大学、アンタナナリヴ大学、エジンバラ大学に担当研究者を派遣し、プロジェクトを一過性のものに終わらせないために、今後の研究協力体制について折衝・調整を行った。

研究上の成果は、業績欄にあげられている論文・書籍・学会発表が示すように、顕著なものである。とくに英語による論文・書籍・学会発表が多かったことは、本事業によるところが大きいと考えている。さらに、連携研究者や若手研究者らが中心となって ASM の特集号を出版した。この特集号には若手研究者らによる国際共著論文 3 本が含まれる。また本事業の内容や成果を京都大学において議論するため、昨年度に続けて今年度は 5 回「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」を開催した。いずれも盛況で、連携研究者と担当研究者を中心とする参加者の間で非常に活発な議論が行われた。

また今年度も、本事業で重点を置く GIS 関連資料解析・動画資料データベースの構築に向けてハードウェアとソフトウェアの整備を行った。これらによってアフリカセンターと ASAFAS アフリカ専攻は、アフリカ地域研究に関して、日本はもちろん世界有数の研究資料を有し、地域を包括的にとらえていくことが可能な教育研究機関となっている。さらに平成 27 年度に公開した本事業独自のホームページ（和文、英文）には、本事業の研究成果や派遣報告書を和文および英文で順次掲載している。これはとくに、連携機関との間で本事業の内容や成果に関する相互理解を高めることに貢献している。前述のように、このホームページは本事業の成果を記録に残すために DVD 化した。

4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <p>・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・著者名について、責任著者に「※」印を付して下さい。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については <u>下線</u>、若手研究者については <u>波線</u> を付して下さい。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>として下さい。</p>	
1	池野 旬（2017）「現代タンザニア土地政策の構図―「慣習的」土地権と国土利用計画」、『現代アフリカの土地と権力』（武内進一編）東京：アジア経済研究所， pp.173-200（査読有）
2	<u>Ikeno, J.</u> (2018) Intra- and Inter-Sectorial Competition for Water Resources around Mwangi Town in Kilimanjaro Region, Tanzania. In .J. IKENO, G. Ueda & U. Tanaka (eds.), <i>Resources vitalizing Local Society in Tanzania (African Study Monographs Supplementary Issue)</i> 55: 101-118（査読有）
3	Mhando, D. G.* & <u>Ikeno, J.</u> (2018) Production and Marketing of Orange in Two Villages in Muheza District, Tanzania. In J. IKENO, G. Ueda & U. Tanaka (eds.), <i>Resources vitalizing Local Society in Tanzania (African Study Monographs Supplementary Issue)</i> 55: 85-98（査読有）
4	Sheikh, M. A.*, Ali, A. H., Khamis, A. A., Rashidi Juma RASHIDI, Ali, H. R., <u>Ikeno, J.</u> & Tanaka, U., (2018) Quality of Groundwater from Open-wells in Rural and Peri-urban Areas of Unguja Island, Zanzibar, In J. Ikeno, G.Ueda & U. Tanaka (eds.), <i>Resources vitalizing Local Society in Tanzania (African Study Monographs Supplementary Issue)</i> 55: 119-142（査読有）
5 ○	高田 明（印刷中）「子どもと大人：社会化と主体性のほざまで」、『文化人類学の思考法』（松村圭一郎・中川理・石井美保編）京都：世界思想社。(査読無)
6	高田 明（2017）「南西アフリカ（ナミビア）北中部のサンの定住化・キリスト教化」『狩猟採集民からみた地球環境史：自然・隣人・文明との共生』（池谷和信編）東京：東京大学出版会， pp.203-216.（査読無）
7	高田 明（2017）「再演される出産：ボツワナにおける再定住政策と異常出産の治療儀礼」『子どもを産む・家族をつくる人類学：オールタナティブへの誘い』（松岡悦子編）東京：勉誠出版 pp.185-209. (査読無)
8	<u>Takada, A.</u> (2018) Environmentally coupled gestures among the Central Kalahari San. In D. Favareau (Ed.), <i>Co-operative Engagements in Intertwined Semiosis: Essays in Honour of Charles Goodwin</i> . Tartu: The University of Tartu Press, pp.397-408. (査読無)
9	<u>Takada, A.</u> (2018) Diversity in child-rearing practices among the San: Characteristics of gymnastic behaviour among the G!ui/G!ana. In U. Zoch (Ed.), <i>The festschrift for Rainer Vossen. (40 Jahre Afrikanistik)</i> Cologne, Germany: Ruediger Koeppe Verlag Koeln. (査読有)
10 ○	Morelli, G. A.*, Quinn, N., Chaudhary, N., Vicedo, M., Rosabal-Coto, M., Keller, H., Murray, M., Gottlieb, A., Scheidecker, G., & <u>Takada, A.</u> (2018). Ethical Challenges of Parenting Interventions in Low- to Middle-income Countries. <i>Journal of Cross-Cultural Psychology</i> 49(1): 5-24.（査読有） DOI: 10.1177/0022022117746241(invited article)
11	<u>Takada, A.</u> (2018) Introduction to The Supplementary Issue “Reconstructing the Paradigm of African Area Studies in a Globalizing World”, In A. Takada (Ed.), <i>Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world (African Study Monographs, Supplementary Issue)</i> 54:3-12.（査読無）
12	<u>Takada, A.</u> (2018) The Kyoto School of Ecological Anthropology: A Source of African Area Studies at Kyoto University, In A. Takada (Ed.), <i>Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world (African Study Monographs, Supplementary Issue)</i> 54: 41-57 (査読有)

13 ○	Rosabal-Coto, M.*, Quinn, N., Keller, H., Vicedo, M., Chaudhary, N., Gottlieb, A., Scheidecker, Murray, M., <u>Takada, A.</u> , & G., Morelli, G. A. (2017). Real-world applications of attachment theory. In H. Keller and K. A. Bard (Eds.), <i>The cultural nature of attachment: Contextualizing relationships and development</i> . (Struengmann Forum Reports, vol. 22, J. R. Lupp, series editor). Cambridge, MA: MIT Press, pp.335-354. (査読無)
14	Morelli, G. A.*, Chaudhary, N., Gottlieb, A., Keller, H., Murray, M., Quinn, N., Rosabal-Coto, M., Scheidecker, G., <u>Takada, A.</u> , & Vicedo, M. (2017). Taking culture seriously: A pluralistic approach to attachment. In H. Keller and K. A. Bard (Eds.), <i>The cultural nature of attachment: Contextualizing relationships and development</i> . (Struengmann Forum Reports, vol. 22, J. R. Lupp, series editor). Cambridge, MA: MIT Press, pp.139-169. (査読)
15	<u>木村大治</u> (2018)「平等性と対等性について」『生態人類学会ニュースレター』23: 14-16 (査読無)
16	<u>木村大治</u> (2017)「出会いと挨拶の相互行為論」『人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B507』 pp. 12-14 (査読無)
17	寺門和夫*, <u>木村大治</u> , 高井研 (2017)「生命の起源を探すフロンティア: 我々はどこからやってきて, どこへ行くのか?」川口淳一郎(編)『AI・ロボット・生命・宇宙... 科学技術のフロンランナーがいま挑戦していること』東京: 秀和システム pp.185-204 (査読無)
18	<u>Kaji, S.</u> (2017) On the intransitive usage of transitive verbs in Tooro, a Bantu language of Western Uganda, <i>Journal of African Languages and Linguistics</i> 38(2): 187-222. (査読有)
19	<u>Kaji, S.</u> (2018) Do we need to postulate a different tone pattern for monosyllabic verbs in Nyoro? <i>Acta humanistica et scientifica Universitatis Sangio Kyotiensis. (Humanities series)</i> 51: 1-17 (査読有)
20	<u>Kaji, S.</u> (2018) From Nyoro to Tooro: Historical and Phonetic Accounts of Tone Merger. In (Kubozono, Haruo and Mikio Giriko eds.) <i>Tonal Change and Neutralization</i> . pp.330-349. Berlin: Mouton De Gruyter. (査読有)
21	<u>山越言</u> (2017)「地域研究とヒトと動物の関係学」『ヒトと動物の関係学会誌』pp.47:6-7. (査読無)
22	<u>金子守恵</u> (2017)「6. 土器づくりの手」pp. 422-427, 「26. インターフェイスとしての手」pp. 525-528,『手の事典』東京: 朝倉書店. (査読無)
23	<u>佐藤宏樹</u> (2017)「昼も夜も動くキツネザル: 周日行性の系統発生と至近メカニズム, および適応的意義をさぐる」『霊長類研究』 33: 3-20
24	<u>有井晴香</u> (2017)「恋する娘たちの結婚と就学—エチオピアの少数民族マーレ」(清水貴夫・亀井伸孝編)『子どもたちの生きるアフリカ—伝統と開発がせめぎあう大地で』京都: 昭和堂, pp.80-94. (査読無)
25	<u>有井晴香</u> (2018)「「妊婦の家」—エチオピア西南部マーレにおける医療施設での出産に関する現状と課題」『アフリカ研究』92 (印刷中) (査読有)
26	<u>Arii, H.</u> (2018) “A Woman Like a Man” and “A Stupid Woman”: The Narrative of Gendered Value and The Expansion of School Education in Maale, Southwestern Ethiopia, In A. Takada (Ed.), <i>Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world (African Study Monographs, Supplementary Issue)</i> 54:101-114. (査読有).
27	<u>園田浩司</u> (2017)「森との向き合い方を学ぶ カメルーンの狩猟採集民バカ (一)」『子どもたちの生きるアフリカ—伝統と開発がせめぎあう大地で』(清水貴夫・亀井伸孝編) 京都: 昭和堂. pp. 114-127. (査読無)
28 ○	<u>園田浩司</u> (2017)「カメルーンのアフリカ研究—ヤウンデ第1大学を訪問して」(研究情報)『アフリカ研究』91: 63-64. (査読無)
29	<u>Sonoda, K.</u> , Bombjakova, D. and Gallois, S., (2018) Cultural Transmission of Foundational Schemas among Congo Basin Hunter-Gatherers, In A. Takada (Ed.), <i>Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world (African Study Monographs, Supplementary Issue)</i> 54:155-169. (査読有).

30 ◎	<u>Kappeler, P.M.*</u> , Cuozzo, F.P., <u>Fichtel, C.</u> , Ganzhorn, J.U., Gursky-Doyen, S., Irwin, M.T., <u>Ichino, S.</u> , Lawler, R., Nekaris, A., Ramanamanjato, J., Radespiel, U., Sauther, M.L., Wright P.C. and Zimmermann, E., (2017) Long-term field studies of lemurs, lorises, and tarsiers, <i>Journal of Mammalogy</i> 98(3): 661-669. (査読有)
31 ◎	<u>Ichino, S.*</u> Maehata, T., <u>Rakotomanana, H.</u> and <u>Rakotondraparany, F.</u> (2018) Forest Vertebrate Fauna and Local Knowledges Among the Tandroy People in Berenty Reserve, Southern Madagascar: A Preliminary Study. In Takada, A. (ed.), <i>Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world (African Study Monographs, Supplementary Issue)</i> 54: 115-135. (査読有)
32	<u>Ichino, S.</u> and Maehata, T. (2017) <i>Biby sy Vorona eto Berenty</i> . Kyoto: Kyoto University Lemur Research Team.
33 ○	<u>Zi, Y.*</u> and Monageng, M. (2018) Decoding Relationships between Chinese Merchants and Batswana Shop Assistants: The Case of China Shops in Gaborone, In Takada, A. (ed.), <i>Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world (African Study Monographs, Supplementary Issue)</i> 54: 171-189. (査読有)
34	<u>Zi, Y.</u> (2017) <i>Iron Sharpens Iron: Social Interactions at China Shops in Botswana</i> . Cameroon: Langaa Research & Publishing Common Initiative Group. (査読無)
35	<u>丸山淳子</u> (2017) 「南アフリカの先住民」が現れるまで：ポスト・アパルトヘイト時代のサンの挑戦」白石壮一郎・椎野若菜（編）『100万人のフィールドワーカーシリーズ：社会問題と出会う』東京：古今書院,pp132-149 (査読無)
36	<u>丸山淳子</u> (2017) 「狩猟採集民の移動と定住化」島田周平・上田元（編）『世界地誌シリーズ8 アフリカ』東京：朝倉書店,pp.78-79 (査読無)
37	<u>丸山淳子</u> (2018) 「ボツワナ中西部における「ブッシュマン観光」の成立と展開：観光と地域の社会関係のダイナミズム」アフリカ研究 92号 (印刷中) (査読有)
38	深山直子・ <u>丸山淳子</u> ・木村真希子編 (2018) 『先住民からみる現代世界：わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』京都：昭和堂 (査読無)
39	<u>Maruyama, J.</u> (2018) From “Displaced Peoples” to “Indigenous Peoples”: Experiences of The !Xun and Khwe San in South Africa. In A. Takada (Ed.), <i>Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world (African Study Monographs, Supplementary Issue)</i> 54: 137-154. (査読有)

②学会等における発表

発表題名 等	
(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。) ・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には <u>二重下線</u> 、担当研究者については <u>下線</u> 、若手研究者については <u>波線</u> を付して下さい。 ・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については <u>斜体・太下線</u> 、連携研究者については <u>斜体・破線</u> として下さい。	
1	<u>池野 旬</u> (2017) タンザニアの土地権に関する一考察—1999年村落土地法を素材として。日本アフリカ学会。於：信州大学，長野市。2017年5月20日(審査有)(口頭発表)
2	<u>高田 明</u> (2018) 養育者—子ども間相互行為研究への人類学的アプローチ：ナミビア北中部のクン・サンにおける睡眠，授乳，ジムナスティックの分析から。子どものこころの分子統御機構研究センター平成29年度連続セミナー第4回。於：大学大学，吹田市。2018年1月9日(招待講演)(口頭発表)
3	<u>Takada, A.</u> (2017) Introduction to Voices for The Future: African Area Studies in a Globalizing World. The International Symposium "France-Japan Area Studies Forum". Kyoto University, Kyoto. 2nd December 2017. (オーガナイザー)
4	<u>Takada, A.</u> (2017) The medium of instruction in north-central Namibia in colonial times. 7th African Forum: Grahamstown: 'African potentials' to develop alternative methods of addressing global issues. Rhodes University, Grahamstown, South Africa, 25th November 2017. Program and abstracts, p.10. (審査無)(口頭発表)

5	高田 明 (2017) 言語人類学, エスノメソドロロジー, 会話分析ーコミュニケーションの民族誌から相互行為の人類学へ. テーマセッション「エスノメソドロロジーと会話分析の半世紀」における話題提供. 於:東京大学本郷キャンパス, 東京. 2017年11月4日. (審査有) (口頭発表)
6	高田 明 (2017) 子育ての自然誌: ナミビア北中部のクン・サン (ブッシュマン) の事例から. 大同生命地域研究賞第11回ミニフォーラム. 於: 大同生命保険会社, 東京. 2017年10月25日 (招待講演) (口頭発表)
7	高田 明 (2017) 子育ての自然誌: ナミビア北中部のクンにおける養育者ー子ども間相互行為の事例から. 第106回日本小児科学会山形地方会 特別講演. 於: ホテルメトロポリタン山形, 山形市. 2017年8月26日. (招待講演) (口頭発表)
8	高田 明 (2017) 音楽の起源再考: サンにおける乳児向け発話の事例分析から. ラウンドテーブル3「ヒトの音楽性に迫る: その起源と発達についての多角的検討」における話題提供. 日本赤ちゃん学会第17回学術集会プログラム抄録集, p.40. 於: 久留米シティプラザ, 福岡市. 2017年7月9日. (査読有) (口頭発表)
9	Takada, A. (2017) Panel discussant of Roundtable 1: De-centering Europe: Not only from the South but also from the East and from the North (together with F., <u>Widlok, T.</u> , Krause, F., Ventsel, A., Gray, P., Drazkiewicz, & E., Wemheuer). The GSSC conference "The Global South on the Move: Transforming Capitalism, knowledge and ecologies". The University of Cologne, Cologne, Germany, 7th June 2017. The conference program, p.11. (招待講演) (口頭発表)
10	高田 明 (2017) ナミビア北中部における景観の変遷: クンとオバンボのコンタクトゾーンにおける地域史再考. 於: 神戸大学. 2017年5月27日. (査読有) (口頭発表)
11	高田 明 (2017) 植民地期の南西アフリカ (現ナミビア) 北中部における教育媒介言語. 日本アフリカ学会第54回学術大会研究発表要旨, p.128. 於: 信州大学, 長野市. 2017年5月21日. (査読有) (口頭発表)
12	木村大治*, 松浦直毅 (2017) 趣旨説明 趣旨説明化, ワンバ地域の経時的変化 (フォーラム: コンゴ民主共和国における紛争後の農村変容 1). 第54回日本アフリカ学会学術大会. 於: 信州大学, 長野市. 2017年5月21日 (審査無) (口頭発表)
13	木村大治 (2017) 出会いと挨拶の相互行為論. 人工知能学会 SLUD (言語・音声理解と対話処理) 研究会. 於: 京都大学, 京都市. 2017年7月28日 (審査無) (招待講演)
14	梶 茂樹 (2017) 日本学術会議提言「ことばに対する能動的態度を育てる取り組みー初等中等教育における英語教育の発展のために」をめぐって. 日本学術会議夏季部会. 於: 島根大学, 松江市. 2017年7月31日 (審査無) (口頭発表)
15	梶 茂樹 (2017) 無文字社会の文字的コミュニケーションーアフリカでの言語調査から. 神戸外国語大学講演会. 於: 神戸外国語大学, 神戸市. 2017年10月23日 (審査無) (口頭発表)
16	山越言 (2017) チンパンジーは雑草種か?: 西アフリカの農業景観における人との共存. 2017年度第1回「人類社会の進化史的基盤研究(4)」. 於: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 府中市, 2017年7月23日 (審査無) (口頭発表)
17	山越言 (2017) 野生チンパンジーから見た人類: 私たちにとって自然な食べ物ってなんだろう. 2017年度インスパイア・ハイスクール 北高れくちゅあ 2017ー人類学リレー講義「人類学への招待」. 於: 伊丹北高等学校, 伊丹市. 2017年9月30日 (審査無) (口頭発表)
18	山越言 (2017) 自然保護と人びとの潜在力ー畏れる力と何もしない力. 京都大学アフリカ地域研究資料センター公開講座“アフリカから学ぶこと”. 於: 京都大学, 京都市. 2017年11月18日 (審査無) (口頭発表)
19	Yamakoshi, G., (2018) Importance of oil-palm based landscape in Tropical West Africa: A case from Guinea. International Workshop “Forest Ecological Resources Security for Next Generation: Development and Routine Utilization of Forest Ecological Resources and their Domestication. Kyoto: Kyoto University. 15th January 2018. (審査無) (口頭発表)
20	金子守恵 (2017) エチオピアにおける調査状況と実践的地域研究の試み. 2017年度海外学術調査フォーラム・地域分科会 (VII サハラ以南アフリカ). 於: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 府中市. 2017年7月1日. (招待講演) (口頭発表)

21	<u>佐藤宏樹</u> (2017) マダガスカル北西部熱帯乾燥林における大型種子植物に対するキツネザルの種子散布効. 第27回日本熱帯生態学会. 於: 奄美文化センター, 奄美市. 2017年6月17日 (ポスター発表) (審査有)
22	<u>佐藤宏樹</u> (2017) 種子を散布するキツネザル引き寄せるマダガスカル産大型種子樹木の特徴. 第33回日本霊長類学会. 於: コラッセ福島, 福島市. 2017年7月17日 (口頭発表) (審査有)
23	<u>Sonoda, K.</u> (2017) Language socialization among Baka children in eastern Cameroon, France-Japan Area Studies Forum, Kyoto: Kyoto University, 3rd December 2017 (口頭発表) (審査無)
24	<u>Reckin, R.*</u> , <u>Lew-Levy, S.</u> , <u>Kissler, S.</u> , <u>Boyette, A.H.</u> , <u>Crittenden, A.N.</u> , <u>Sonoda, K.</u> , <u>Stieglitz, J.</u> , <u>Lavi, N.</u> , <u>Ellis-Davies, K.</u> , (2017) A cross-cultural examination of the trade-off between work and play among forager children, The 116th American Anthropological Association Annual Meeting, Washington, D.C., 29th November-3rd December 2017 (口頭発表), (審査有),
25	<u>Ichino, S.</u> (2017) Long-term field study and conservation at Berenty Reserve, southern Madagascar (Part 1), The 7th Seminar of Reconstructing the Paradigm of African Area Studies, Kyoto University, Kyoto, 12th September, 2017. (審査無) (口頭発表)
26	<u>市野進一郎</u> (2017) マダガスカルでこんな研究しています, 世界キツネザルフェスティバル 2017 in JMC, 於: 日本モンキーセンター, 犬山市. 2017年10月21日 (招待講演) (口頭発表)
27	<u>Ichino, S.*</u> and <u>Ranomenjanahary, P.</u> (2017) Do aged female lemurs become socially less active? Behavioral aging in ring-tailed lemurs (<i>Lemur catta</i>), Göttinger Freilandtage 2017: Social Complexity: Patterns, Processes and Evolution, 13th-15th December, 2017, German Primate Center, Göttingen, Germany, (ポスター発表) (審査有)
28	<u>Ichino, S.</u> (2017) Potential of small forest: long-term field study and biodiversity conservation at Berenty Reserve, southern Madagascar. International Symposium: Voices for the Future: African Area Studies in a Globalizing World, Kyoto University, Kyoto, 2nd December, 2017 (審査無) (口頭発表)
29	<u>市野進一郎</u> (2017) キツネザル類の社会行動とコミュニケーション, 第47回ホミニゼーション研究会「言語の生物学と進化」, 於: 京都大学霊長類研究所, 犬山市. 2017年12月20日 (招待講演) (口頭発表)
30	<u>Zi, Y.</u> (2017) Challenges and Opportunities for Chinese Business Upgrades. International Symposium: Voices for the Future: African Area Studies in a Globalizing World. Kyoto University, Kyoto. 3rd December 2017. (審査無) (口頭発表)
31	<u>Zi, Y.</u> (2017) Everyday lives of Chinese in Botswana. Workshop, Dialogues with Ethnography: The Lived Experiences of Chinese Migrants in Africa. University of Vienna, Vienna, Austria, 26-27th June 2017. (審査無) (口頭発表)
32	<u>丸山淳子</u> (2017) ボツワナにおける「ブッシュマン観光」の成立とその展開. 日本アフリカ学会第54回学術大会. 於: 信州大学, 長野市. 2017年5月21日. (審査無) (口頭発表)
33	<u>丸山淳子</u> (2017) 先住民の法廷闘争と遊動生活: ボツワナのサンを事例に. シンポジウム: 先住民族と法: 文化人類学、憲法学、国際法学の立場から. 於: 中京大学, 名古屋. 2017年9月30日. (審査無) (口頭発表)
34	<u>Maruyama, J.</u> , (2017) Divided Land, Shared Land: Recent Land Issues among the San Hunter-Gatherers in Central Kalahari. African Forum: African Potentials to Develop Alternative Methods of Addressing Global Issues. Rhodes University, Grahamstown, South Africa. 26th November, 2017. (審査無) (口頭発表)
35	<u>Maruyama, J.</u> , (2017) Nature conservation, land access and economic disparities among the San hunter-gathers in Southern Africa. International Symposium: Voices for the Future: African Area Studies in a Globalizing World. Kyoto University, Kyoto. 3rd December, 2017. (審査無) (口頭発表)

5. 若手研究者の派遣実績（計画）

【海外派遣実績（計画）】

年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
派遣人数	2 人	5 人 (2 人)	3 人 (3 人)	5 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の海外派遣実績】

派遣者①の氏名・職名：市野進一郎・ポスドク

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な派遣計画）</p> <p>アフリカ地域における新たな研究課題である「アフリカ生物保全学」を推進するため、メガ多様性国であるマダガスカルで先進的な研究を進めているドイツ霊長類センターとその連携機関であるアンタナナリヴ大学に若手研究者を派遣し、日本側の担当研究者である山越准教授らと協力して連携機関との共同研究を推進する。1989年からマダガスカル南部で続くアフリカセンターの研究グループによる長期継続調査は、基礎データの蓄積と地域密着型運営が高く評価される一方で、欧米の研究グループが主導する生物多様性保全の議論には限定的な影響しか与えていない。本事業ではドイツ、マダガスカル、日本を中心にマダガスカルの長期研究サイトネットワークを形成し、保護区管理に関する国際共同研究を行う。これにより、マダガスカルにおける保護区管理の問題をグローバルな視点で捉えた包括的議論を行う。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成 29 年度はまずドイツ霊長類センターに市野進一郎博士を派遣した。市野博士は、Peter Kappeler 教授らとマダガスカルにおける生物多様性保全についての共同研究を行った。続いて市野博士はアンタナナリヴ大学およびベレンティ保護区を訪問し、Hajanirina Rakotomanana 教授らと保護区管理についての共同研究を行った。これらを通じて市野博士は、ドイツ、マダガスカル、日本が連携してマダガスカルにおける長期研究と保護区管理を両立させることを目指したネットワークを形成しつつある。12月1日～3日に行われた国際シンポジウムにおいては“How does long-term field study contribute to biodiversity conservation in Madagascar?”というセッションをオーガナイズした。またASM 特集号“Reconstructing the Paradigm of African Area Studies in a Globalizing World”に共著者の Teruya Maehata 氏, Hajanirina Rakotomanana 博士, Felix Rakotondraparany 博士と“Forest Vertebrate Fauna and Local Knowledges Among the Tandroy People in Berenty Researve, Southern Madagascar: A Preliminary Study”という論文を寄稿した。</p>				
派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
マダガスカル, アンタナナリヴ大学, 理学部動物学科, Hajanirina Fanomezantsoa Rakotomanana 教授	40 日	165 日	26 日	231 日
ドイツ, ドイツ霊長類センター, 行動生態学・社会生物学部門, Peter Kappeler 教授	13 日	32 日	55 日	100 日

派遣者③の氏名・職名：有井晴香・ポスドク

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

有井晴香博士は、平成 28-29 年度にかけて、人と自然の交渉史に関する共同研究の一環として、エチオピアのアジス・アベバ大学、フランスの EHESS、ドイツのケルン大学において、担当研究者である金子守恵准教授らと共同で、在来知を用いた地域開発についての研究を行う。

(具体的な成果)

平成 29 年度は、有井晴香博士はケルン大学で連携研究者の Bollig 教授らと農村女性の民族誌に関する共同研究を行った。また続いて訪問した EHESS では、Frédéric Joulian 准教授らと在来知の活用に関する共同研究を行った。12 月 1 日～3 日に行われた国際シンポジウムでは“The relationship between women’s life course and school education”というセッションをオーガナイズした。また ASM 特集号 “Reconstructing the Paradigm of African Area Studies in a Globalizing World” に “A Woman Like a Man” and “A Stupid Woman”: The Narrative of Gendered Value and The Expansion of School Education in Maale, Southwestern Ethiopia” という論文を寄稿した。さらに国際シンポ後にはエチオピアのアジス・アベバ大学に派遣し、Gebre 教授と本プログラムの成果について議論したうえで、エチオピアの研究者との共同研究体制のもとエチオピア農村女性の民族誌に関する資料収集および南部エチオピア農村における女性のライフストーリーに関する現地調査を行った。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
エチオピア, アジス・アベバ大学, 社会科学学校, Gebre Yntiso Deko 教授	0 日	71 日	80 日	151 日
ドイツ, ケルン大学, ケルン・グローバルサウス研究センター Clemens Grainer 上級講師	0 日	0 日	165 日	165 日
フランス, 国立科学研究センター, 社会科学高等研究院, Frédéric Joulian 准教授	0 日	0 日	22 日	22 日

派遣者⑤の氏名・職名：園田浩司・ポスドク

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)
 西アフリカでの長期フィールドワークを行ってきた園田浩司博士を平成 28-29 年度にかけてカメルーンのヤウンデ第 1 大学およびスコットランドのエジンバラ大学に派遣する。園田博士は、日本側の担当研究者である木村大治教授らと協力して、アフリカの子どもの言語的社会的実態を明らかにする研究を行う。

(具体的な成果)

平成 29 年度、園田博士はエジンバラ大学に派遣され、とくに西アフリカにおける子どもの社会化過程に注目しながら、動態的な社会関係知識の伝承や再生産の実態を明らかにする研究を行った。12 月 1 日～3 日に行われた国際シンポジウムにおいては“Child socialization and learning environment in Africa”というセッションをオーガナイズした。また ASM 特集号“Reconstructing the Paradigm of African Area Studies in a Globalizing World”に共著者の Daša Bombjaková 博士, Sandrine Gallois 博士と“Cultural Transmission of Foundational Schemas among Congo Basin Hunter-Gatherers”という論文を寄稿した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
カメルーン、ヤウンデ第 1 大学、文化人類学科、Mbonji Edjenguélé 学科長	0 日	177 日	0 日	177 日
スコットランド、エジンバラ大学、アフリカ研究センター、Barbara Bompani 所長	0 日	49 日	104 日	153 日
イギリス、ロンドン大学(資料収集)	0 日	2 日	0 日	2 日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

6. 研究者の招へい実績(計画)

【招へい実績(計画)】

年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
招へい人数	6 人	3 人 (1 人)	15 人 (3 人)	20 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者①の氏名・職名：Clemens Greiner・上級講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)
 本プロジェクトにおいて Greiner 上級講師は、アフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進する役割を担う。とくに、ドイツにおけるアフリカ諸地域を対象とした景観研究と民族学研究の関係に着目し、上記の課題についての議論を行う。

(具体的な成果)

平成 28 年度末から 29 年度始めにかけて、Greiner 上級講師を 13 日間招聘し、ケルン大学と京都大学の間でアフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進していくための議論を行った。また上級講師自身が進めてきたナミビアにおける環境利用および社会経済的な人の移動と階層化に関して、やはり同地域で調査を進めている日本側の受入研究者らと議論を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ケルン大学・ケルン・グローバルサウス研究センター，ドイツ；日本側受入研究者： 高田明（京都大学）	12 日	3 日	13 日	28 日

招へい者②の氏名・職名：**Peter Kappeler**・教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>本プロジェクトにおいて Kappeler 教授は，地域のデザインに関する国際共同研究の中心的な役割を担う。Kappeler 教授が 2009 年にゲッティンゲンで開催した国際シンポジウムには，マダガスカル の 4 箇所の研究サイトが参加した。これらの研究サイトは，霊長類の生活史に関する情報共有を進めている。本事業では，この 4 箇所に新たに 1 箇所を加えたマダガスカル長期研究サイトネットワークを形成し，保護区管理の長期継続に関わる分析を共同で行う。Kappeler 教授にはこのネットワークの中心メンバーの一人として参加していただく。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>Kappeler 教授が多忙のため事業開始時の計画よりも招へい時期が遅れたが，同氏を平成 29 年 9 月に 12 日間招へいした。日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらに地域のデザインに関する国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行うとともに，9 月 12 日に京都大学で開催された第 7 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナーにおいて連携研究者の Claudia Fichtel 博士と “Long-term field study and conservation at Kirindy forest, western Madagascar” という発表を行った。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ドイツ霊長類センター，行動生態学・社会生物学部門，ドイツ；日本側受入研究者： 山越 言（京都大学）	0 日	0 日	12 日	12 日

招へい者④の氏名・職名：Hajanirina Fanomezantsoa Rakotomanana・教授

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画）

Rakotomanana 教授は、地域のデザインに関する国際共同研究にマダガスカル代表者として参加する。主に研究活動を行っているマダガスカル北西部アンカラファンチカ国立公園の事例を中心に生物多様性保全の状況と管理手法について報告してもらう。マダガスカルで生物多様性保全の研究が行われている研究サイトの状況について情報収集を行ってもらうと同時に、マダガスカル長期研究ネットワークの中心メンバーとして参加していただく。招へい中はマダガスカルの保護区管理に関わる紛争事例の分析を共同で行う。また、若手研究者の派遣中は円滑なフィールド調査にも協力していただく。

（具体的な成果）

平成 29 年度には、本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Rakotomanana 教授を 10 日間招へいした。国際シンポでは Rakotomanana 教授は、“Twenty-year development of zoological and botanical research topics in the University of Antananarivo: Implication for future challenges of biodiversity conservation” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらに地域のデザインに関する国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
アンタナナリヴ大学・理学部動物学科，マダガスカル；日本側受入研究者：山越言（京都大学）	63 日	0 日	10 日	73 日

招へい者⑤の氏名・職名：Frédéric Joulian・准教授

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

フランスの EHESS の連携研究者である Frédéric Joulian 准教授は、日本側の受入研究者である山越准教授らとアフリカ地域におけるローカルな知の活用についての共同研究を行う。とくに技術や文化の進歩，民族考古学的な研究について，アフリカの諸地域における具体的な資料に基づいた議論を行う予定である。こうした人類社会の進歩を論じる民族考古学的な研究は、「人類のゆりかご」と呼ばれるアフリカにおいては地域研究の重要な一角をなす。

（具体的な成果）

平成 29 年度は Joulian 准教授を京都大学に国際シンポを含む 2 週間招へいして受入研究者らと予定していた議論を行った。国際シンポでは Frédéric Joulian 准教授は、共同研究者の Yann-Philippe Tastevin 博士と“Wood and engines: Elementary actions on matter and transfers of know-how between cultures” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカ地域におけるローカルな知の活用についての国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
国立科学研究センター，社会科学高等研究院，フランス；日本側受入研究者：山越言（京都大学）	0 日	71 日	14 日	85 日

招へい者⑥の氏名・職名：Aynalem Megersa・助教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)
 アジス・アベバ大学の連携研究者に推薦してもらった Aynalem Megersa 助教授を平成 29 年度に本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて 1 週間程度招へいする。また日本側の受入研究者と共同で、エチオピア南部における女子の雇用と婚姻に関する共同研究を進める。これにより、アフリカ地域研究における地域のデザインのあり方について、新しいパラダイムの創造を志す。

(具体的な成果)

本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Megersa 助教授を 9 日間招へいした。国際シンポでは Megersa 助教授は、“Rural women’s employment and marriage: The case of Sebeta Hawas woreda, central Oromia, Ethiopia” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらに地域のデザインに関する国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
アジス・アベバ大学，ジェンダー研究所， エチオピア；日本側受入研究者：高田明 (京都大学)	0 日	0 日	9 日	9 日

招へい者⑦の氏名・職名：Peter Dannenberg・教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)
 本プロジェクトの主要連携研究者である Michael Bollig 教授らに推薦してもらって、平成 29 年度に本事業が主催する国際シンポジウムにあわせてケルン大学から Dannenberg 教授を 1 週間程度招へいする。Dannenberg 教授は、アフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進する役割を担う。とくに、ドイツにおけるアフリカ諸地域を対象とした景観研究と民族学研究の関係に着目し、やはり上記の課題について調査を進めている日本側の受入研究者らと議論を行う。

(具体的な成果)

本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Dannenberg 教授を 8 日間招へいした。国際シンポでは Dannenberg 教授は、“How value chain conditions influence the effectiveness of ICTs on the integration of East African farmers” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ケルン大学・地理学部，ドイツ；日本側 受入研究者：高田明（京都大学）	0 日	0 日	8 日	8 日

招へい者⑧の氏名・職名：Hazel Gray・講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)
 本プロジェクトの主要連携研究者である Barbara Bompani 教授らに選考してもらって、エ

ジンバラ大学から Gray 講師を 1 か月間程度招へいする。Gray 講師は、アフリカにおける地域のデザインに関する国際共同研究の中心的な役割を担う。とくに、エジンバラ大学が長年にわたって進めてきた地域開発に関する社会科学的アプローチに着目し、やはり上記の課題について調査を進めている日本側の受入研究者らとの議論を行う。

(具体的な成果)

同氏を平成 29 年 12 月に約 1 ヶ月間招へいした。日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカにおける地域のデザインに関する国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行うとともに、12 月 8 日に京都大学で開催された第 9 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナーにおいて“**The Comparative Political Economy of Industrialization in Tanzania and Vietnam**”という発表を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
エジンバラ大学・アフリカ研究センター、スコットランド；日本側受入研究者：池野旬（京都大学）	0 日	0 日	29 日	29 日

招へい者⑭の氏名・職名：Claudia Fichtel・上級科学者_____

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

本プロジェクトにおいて Fichtel 上級科学者は、地域のデザインに関する国際共同研究を推進する役割を担う。とくに本事業で推進しているマダガスカルにおける長期研究サイトネットワークの形成、および保護区管理の長期継続に関わる分析の実務を担う。この国際共同研究は、ドイツ霊長類センターの Kappeler 教授の監督のもと、日本側受入研究者とともに行う予定である。そこで Kappeler 教授の招へい時期にあわせて、平成 29 年度に Fichtel 上級科学者を 3 週間程度招へいする。

(具体的な成果)

同氏を平成 29 年 9 月に 12 日間招へいした。日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらに地域のデザインに関する国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行うとともに、9 月 17 日に京都大学で開催された第 7 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナーにおいて主要連携研究者の Peter Kappeler 教授と“**Long-term field study and conservation at Kirindy forest, western Madagascar**”という発表を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ドイツ霊長類センター，行動生態学・社会生物学部門，ドイツ；日本側受入研究者：山越言（京都大学）	0 日	0 日	12 日	12 日

招へい者⑮の氏名・職名：Thomas Widlok・教授_____

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

ドイツのケルンの連携研究者である Thomas Widlok 教授を京都大学に 2 週間程度招へいする。本プロジェクトにおいて Widlok 教授は、アフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究の中心的な役割を担う。とくに、ドイツにおけるアフリカ諸地域を対象とした景観研究と民族学研究の関係に着目し、上記の課題についての議論を行う。さらに、Widlok 教授自身が進めてきたナミビアに住むサン（南部アフリカの狩猟採集民・先住民として知られる）における環境認識と文化表象の関係に関して、やはり同地域

で調査を進めている日本側の受入研究者らと議論を行う。 Thomas Widlok 教授が多忙のため事業開始時の計画よりも招へい時期が遅れたが、平成 29 年度には同氏を 2 週間程度招へいする。

(具体的な成果)

同氏を平成 30 年 3 月に 11 日間招へいした。日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカ諸地域を対象とした景観研究と民族学研究の関係についての国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行うとともに、3 月 5 日に京都大学で開催された第 11 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナーにおいて Framing Future Africa: A report on new collaborative research in the programme “Future rural Africa: future-making and social-ecological transformation”という発表を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ケルン大学・ケルン・グローバルサウス研究センター，ドイツ；日本側受入研究者：高田明（京都大学）	0 日	0 日	11 日	11 日

招へい者⑯の氏名・職名：Remy Bazenguissa-Ganga・教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

フランスの国立科学研究センター・社会科学高等研究院の連携研究者として Remy Bazenguissa-Ganga 教授を京都大学にまず 1 ヶ月程度招へいする。Bazenguissa-Ganga 教授は、日本側の受入研究者である高田准教授らとアフリカ地域の空間的・時間的な組織化についての国際共著論文の執筆等を目的とした共同研究を行う。とくにアフリカにおけるグローバル化に関する共同研究の一環として、アフリカにおけるアジア人の表象形成、およびアジアにおけるアフリカ人の表象形成に関する共時的・通時的な分析を行い、本事業で立ち上げた「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」の枠組みでこれに関するセミナーを開催する。さらに、本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Bazenguissa-Ganga 教授を 1 週間程度招へいする。

(具体的な成果)

同氏をまず平成 29 年 10 月に約 1 ヶ月間招へいした。日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカ地域の空間的・時間的な組織化についての国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行うとともに、10 月 13 日に京都大学で開催された第 8 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナーにおいて “Re-examining Elections, the African Experience” という発表を行った。さらに本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Bazenguissa-Ganga 教授を 11 日間招へいした。国際シンポでは Bazenguissa-Ganga 教授は、“Tenrikyo, Japanese presence-absence in Congo-Brazzaville” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカにおけるグローバル化に関する共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
国立科学研究センター，社会科学高等研究院，フランス；日本側受入研究者：高田明（京都大学）	0 日	0 日	42 日	42 日

招へい者⑰の氏名・職名：Felix Rakotondraparany・准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

アンタナナリヴ大学の連携研究者に推薦してもらった Rakotondraparany 准教授を平成 29 年度に本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて 1 週間程度招へいする。また、日本側の受入研究者と共同で、マダガスカルにおける生物多様性保全を可能にするための国際共同研究を進める。これにより、アフリカ地域研究における地域のデザインのあり方について、新しいパラダイムの創造を志す。

(具体的な成果)

本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Rakotondraparany 准教授を 10 日間招へいした。国際シンポでは Rakotondraparany 准教授は、若手研究者である市野博士がオーガナイズした “How does long-term field study contribute to biodiversity conservation in Madagascar?” というセッションでディスカッションを務めた。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにマダガスカルにおける生物多様性保全を可能にするための国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者)	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
アンタナナリヴ大学，理学部動物学科，マダガスカル；日本側受入研究者：山越言（京都大学）	0 日	0 日	10 日	10 日

招へい者⑱の氏名・職名：John G. Galaty・教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

平成 29 年度に本事業が主催する国際シンポジウムにあわせてマギル大学の主要連携研究者である Galaty 教授を 1 週間程度招へいする。また、日本側の受入研究者と共同で、アフリカにおけるグローバル化に関する共同研究の一環として、先住民の権利に関する住民運動と研究者の連帯についての国際共同研究を進める。これにより、アフリカ地域研究における地域のデザインのあり方について、新しいパラダイムの創造を志す。

(具体的な成果)

本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Galaty 教授を 17 日間招へいした。国際シンポでは Galaty 教授は，“Conservation landscapes in East Africa” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらに先住民の権利に関する住民運動と研究者の連帯についての国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者)	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
マギル大学，カナダ；日本側受入研究者：高田明（京都大学）	0 日	0 日	17 日	17 日

招へい者⑲の氏名・職名：Eloi Ficquet・准教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

本プロジェクトにおけるフランスの EHESS の主要連携研究者である Frédéric Joulian 准教授らに選考してもらい、平成 29 年度に本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて EHESS から Eloi Ficquet 准教授を 1 週間程度招へいする。Ficquet 准教授は、日本側の受入研究者と共同で、アフリカ地域の空間的・時間的な組織化についての国際共同研究を推進する役割を担う。

(具体的な成果)

本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Ficquet 准教授を 7 日間招へいした。国際シンポでは Ficquet 准教授は、“Some observations on long-distance interactions in the history of Islam and the models they can provide for understanding Africa-Asia relations” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカ地域の空間的・時間的な組織化についての国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
国立科学研究センター，社会科学高等研究院，フランス；日本側受入研究者：高田明（京都大学）	0 日	0 日	7 日	7 日

招へい者⑳の氏名・職名：Emmanuelle Kadya Tall・上級講師

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

本プロジェクトにおけるフランスの EHESS の連携研究者である Bazenguissa-Ganga 教授らに選考してもらい，平成 29 年度に本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて EHESS から Emmanuelle Kadya Tall 上級講師を 1 週間程度招へいする。Tall 上級講師は，日本側の受入研究者と共同で，アフリカ地域におけるローカルな知の活用についての国際共同研究を推進する役割を担う。

(具体的な成果)

本事業が主催する国際シンポジウムにあわせて Kadya Tall 上級講師を 11 日間招へいした。国際シンポでは Kadya Tall 上級講師は，“Asian presence in the religious sphere in West Africa: Some observations from Côte d’Ivoire, Burkina Faso and Benin” という発表を行った。さらに日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらにアフリカ地域におけるローカルな知の活用に関する国際共同研究を推進していくための打ち合わせを行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
国立科学研究センター，社会科学高等研究院，フランス；日本側受入研究者：高田明（京都大学）	0 日	0 日	11 日	11 日

招へい者㉑の氏名・職名：Zoe Marks・研究員

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画)

本プロジェクトの主要連携研究者である Barbara Bompani 教授らに選考してもらって，エジンバラ大学から Zoe Marks 研究員を 3 週間程度招へいする。Marks 研究員は，アフリカにおける地域のデザインに関する国際共同研究の中心的な役割を担う。とくに，エジンバラ大学が精力的に進めている紛争解決と平和構築に関する社会科学的アプローチに着目し，やはり上記の課題について調査を進めている日本側の受入研究者らとの議論を行う。

(具体的な成果)

同氏を平成 30 年 3 月に 21 日間招へいした。日本滞在中は日本側の受入研究者らとこれからさらに地域のデザインに関する国際共同研究，とくに紛争解決と平和構築に関する共同研究を推進していくための打ち合わせを行うとともに，2 月 19 日に京都大学で開催

された第 10 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナーにおいて “Violence and Governance in Guerrilla War” という発表を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
エジンバラ大学・社会政治科学学校，スコットランド；日本側受入研究者：池野旬（京都大学）	0 日	0 日	21 日	21 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

該当なし

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。